

集合体要素を有するポジティブ画像評定と トライポフォビア傾向の関連

西村聡生

(安田女子大学心理学部)

研究の目的

蓮の花托や蜂の巣のような小さな穴や斑点などの集合体に対して嫌悪感が引き起こされる恐怖症は、トライポフォビア（集合体恐怖症）と呼ばれ、またそのような集合体要素を有する画像はネガティブに評価される（Cole & Wilkins, 2013）。本研究では、一般的にポジティブに評価される花や果物、ケーキなどが集合体要素を有する場合について検討する。

方法

参加者 女子大学生 20 名。

刺激 集合体要素を有する蓮の花托や蜂の巣などの画像（集合体画像）、集合体要素を含む花やケーキなどの一般的には好ましいと考えられる画像（ポジティブ集合体画像）、集合体要素を含まない机や椅子などの一般的にはポジティブでもネガティブでもないと考えられる画像（中性画像）3 種類を各 10 枚、合計 30 枚を使用した。

手続き 実験は個別に行った。30 枚の刺激画像を無作為順に並べ、パーソナルコンピュータ画面上に各 6 秒ずつ呈示した。参加者に、それぞれの画像について「非常に嫌悪を感じる（-4）」から「非常に魅力を感じる（+4）」の 9 段階で評定するよう求めた。画像評定終了後、トライポフォビアの説明を行い、トライポフォビア傾向測定のため日本語版 Trypophobia Questionnaire（今泉・古野・日比野・小山, 2016）に回答を求めた。

結果

画像評定値について、画像の種類（集合体、ポジティブ集合体、中性）を参加者内要因とした分散分析を行ったところ、有意であった ($F(2, 38) = 96.95, p < .001$, 偏 $\eta^2 = .836$)。集合体画像 (-1.93) は、ポジティブ集合体画像 (0.83) や中性画像 (0.69) よりも低く評定された (図 1)。ポジティブ集合体画像と中性画像の評定値には、有意差はみられなかった。また、集合体画像は 0 と比べて有意にネガティブに、ポジティブ集合体画像および中性画像は有意にポジティブに評定された ($ps < .005$)。

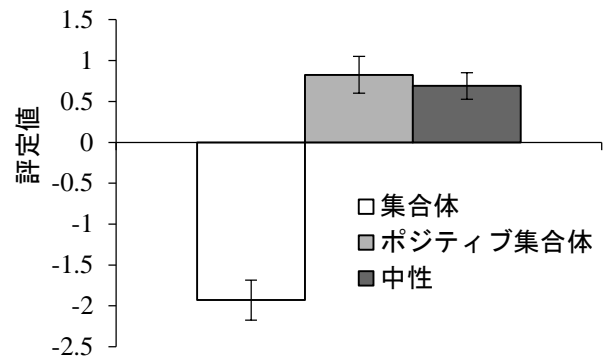


図 1. 画像の種類ごとの評定値。エラーバーは標準誤差を示す。

各参加者のトライポフォビア傾向と画像の種類ごとの評定値との関連について検討したところ、集合体画像 ($r = -.405, p = .077$)、ポジティブ集合体画像 ($r = -.486, p = .030$) とは負の相関がみられたが、中性画像 ($r = .148, p = .534$) とは有意な相関はみられなかった。また、集合体画像とポジティブ集合体画像の評定値には相関がみられたが ($r = .739, p < .001$)、これらは中性画像の評定値とは有意な相関はみられなかった (集合体画像 $r = .305, p = .192$; ポジティブ集合体画像 $r = .252, p = .283$)。

考察

集合体画像は、ネガティブに評価された (Cole & Wilkins, 2013)。一方、一般的にはポジティブに評価される花などが集合体要素を有していた場合、わずかにポジティブと評価されたものの、中性画像とは差がみられなかった。また、ポジティブ集合体画像の評価は集合体画像の評価およびトライポフォビア傾向と相関がみられた。一般的にポジティブに評価される花や果物、ケーキなどが集合体要素を有する場合、それらを魅力的に感じる一方で、集合体に対する嫌悪感も同時に生じると考えられる。

※本研究の一部は、立原優里奈さん（安田女子大学）の 2017 年度卒業研究に基づく。